

1981. 4

302 教室にオルガンを

館長 小野 健 一

大学の教育は講義と実習と図書館との三つの柱によって成り立っているように思います。その意味における図書館が本だけで良かった時代は既に過ぎたのではないのでしょうか。図書館は本と同時にフィルムや音盤、録音テープを備えるべきであり、読書室の他に視聴覚室を有して初めて負託に相応しく機能し得るのではないのでしょうか。

教養図書館は頭の上に大きな講義室を二つ持っています。これを視聴覚室として整備して頂くと、教養図書館は一挙に理想的な近代図書館に生れ変わるように思います。慾を申せば、階下のロッカー室も快適なロビーに改造して、学生諸君に閑談を楽しめる場所を提供するとともに、壁面や展示ケースを使ってちょっとした展示会のようなものも開けるようにしたいところです。誤解のないように申し添えますが、それらを全部教養図書館によこせと言っているわけではありません。教養部の将来の整備計画について、教養図書館長の立場から意見を述べているに過ぎません。視聴覚室やロビーが整備されれば、こちらは安心して音盤やフィルムにまで手を拡げることができるのです。

教養部の建物は外観がいかにも奇異なので、私が着任すると真っ先にしたことは、あの屋根の下がどうなっているのか三階まで見に行くことでした。302教室の扉を開けて中に入った途端に、この部屋の正面にオルガンが欲しいな、という考えが閃きました。それからは302教室に入る機会がある度に、オルガンの規模とか、管の並べ方とか、どんな形式の鍵盤をどこへ置くとか、そんなことばかり考えるようになりました。勿論、とりとめのない空想に過ぎませんでしたが、教養図書館長になってからは、視聴覚室の問題と結びつけて、302教室にオルガンを設置することを真剣に考えるようになりました。年に数回程度、適当な奏者をお招きして、学生諸君にバッハやブクステフーデを生演奏で聴かせることができたらなあ、というのが私の夢なのです。

教養部の建物は奇異だと前に書きましたが、実はこの位考えに考え抜いてデザインされている建物は少ないのではないのでしょうか。講義室の採光とか、外部との隔離、中庭の使い方など、精しく見ていくと一々感心させられます。むしろ、あんまりきっちり作って仕舞ったために、改造の餘地のないことが欠点といえば欠点でしょうか。そろそろ書庫が狭くなったので、何所かへ増設しなくてはならないのですが、既設のものの邪魔にならない場所が仲々見つからないのです。

建物のデザインなどに興味のある方は少いと見えて、この図書館にも、美術書は沢山ありますが、建築関係の本は殆どありません。しかし、本よりも先ず実物を見ることの方が大切で、建物に興味をお持ちの方は教養部の建物をじっくり観察なさると良いと思います。建物に興味のない方も、だまされたと思って、一度気を入れて教養部の建物を御覧になることを勧めます。恐らく建物を見ることの面白さに開眼なさるのではないのでしょうか。302教室を御覧になって、あの部屋にオルガンがないのは画龍点睛を欠くとお感じになるようならもう占めたもの、諸君の審美眼は本ものです。

(物 理 学)

メリメ小伝

山根 和 平

メリメと言うと読者の皆さんは、すぐにビゼエ作曲の歌劇『カルメン』の原作者を思い出すのではないのでしょうか。また、フランス文学に多少とも関心のある人なら、フランスのローマン主義運動の渦中にありながら、どうしても生粋のローマン主義者になりきれなかった作家の一人として、メリメを思い浮かべるかもしれません。けれども、これでメリメの文学的活動と、その一生が語りつくされるわけではありません。筆者がここに、全く自信がないままに、この小伝を書こうと思ったのは、メリメの多彩な生涯のなかから、その片鱗でも伝えることができたなら、読者の皆さんがメリメに近づく「きっかけ」となるかもしれないと考えたからです。『メリメ全集』（958 Me65, 1-7）は教養図書館の中で、文学全集をおさめた棚の片すみに、ひっそりと隠れています。ぜひ、その中の一冊を手にとって読んでくださるようお願いします。

プロスペル・メリメは1803年9月28日にパリで生まれました。父親のレオノール・メリメは、エコール・シュペリウール・ポリテクニクという理工科系の学校の教授で、画家でもあったということです。この父も、また、母親のアンヌも、ノルマンディー地方の出身ですが、一人息子のプロスペルは、生まれも育ちも生粋のバリっ子と言えるでしょう。

メリメが生れて育ったパリは、このころ激動の渦中にありました。メリメ誕生の翌年にはナポレオン・ボナパルトが皇帝になりますが、メリメがリセ・ナポレオンという名の高校（現在のアンリ四世校）に在学中（1811～19年）に、ナポレオンは退位して、ブルボン家のルイ十八世が復位します。つづいてメリメは、パリ大学法学部に入学しますが、卒業の年（1823年）の翌年には、ルイ十八世にかわって、シャルル十世が即位することになります。しかし、このシ

ャール十世は、1830年、メリメが二十七歳のときに、七月革命で退位し、オルレアン公ルイ・フィリップが国王となる、といった具合で、フランスの政情は大変不安定な時代でした。

メリメは法学部の卒業生で、職業としても官職についた期間が生涯で一番長いのですが、他方では、学生時代から文学に興味をもち、友人と共同で『オシアン』をフランス語に訳したりしました。とくに、1822年に、スタンダールと知り合うようになってからは、文学に対する傾斜が強まったようです。このときスタンダールは三十九歳で、『赤と黒』の出版よりも九年前にあたり、他方メリメのほうは、まだ十九歳の大学生でした。この二人の天才の出会い、天才どうしの出会いというものは、たいていそうなるようですが、はなはだ具合の悪いもので、おたがいに相手のことを、「あのおかしな男は誰なんだ」といぶかしく思って、かたわらの友人にたずねたと伝えられています。けれども、二人はすぐに心からの親友として交際するようになり、おたがいに深い影響を与え合うようになります。のちに、1842年、スタンダールが亡くなったとき、メリメは参列者の一人として葬儀に出席していますが、さらに八年後に、『H・B』と題するスタンダール追悼のための小冊子を出版しています。H・Bというのは、スタンダールの本名アンリ・ペイルの頭文字です。

メリメの文学に対する態度は、よく問題になることですが、先輩のスタンダールや後輩のフローベールとは明らかにちがっています。筆者はどちらかと言えば、メリメが文学のアマチュアであったという説に賛成です。ただし、アマとかプロとか言っても、文学活動によって生活していたかどうかが問題なのではありません。そういう意味でなら、スタンダールもフローベールも、すべてアマチュアであって本当にプロと言えるのはバルザックなど少数者にすぎない

と思われます。問題なのは文学活動が、その人の一生をかけた主要な関心事であって、その他のことは片手間にすぎないのか、それとも、文学活動のほうが片手間にすぎないのかといった態度の相違です。この意味で、スタンダールもフローベールもプロの文学者であると言えますが、メリメはどうも、そのような意味でのプロではなかったように思われます。言うまでもなく、このようなことは、作家の才能や作品の価値に直接かかわりをもつものではありませんが、メリメの場合には、少なくとも、作品の形式には影響を与えているようです。たとえば、初期の作品から例をとるならば、『クララ・ガスルの戯曲集』（1825年出版）というのはスペインの女優クララ・ガスルの作品の翻訳だと称して、その女優の肖像画まで巻頭にかかげてありますが、実際には翻訳などではなく、その全部がメリメの創作であり、肖像画もメリメ自身の肖像を女装させて作ったものです。また、次の作品『グズラ』（1827年出版）は、散文詩で、「ダルマチア、ボスニア、クロアチア、ヘルツェゴヴィナで集めたイタリア語詞華集」という長い副題がついていて、いかにも外国の民謡を収集して、翻訳・編集したように見えますが、実際にはメリメの完全な創作です。しかも、グズラ（Guzla）というのは、女優の名クララ・ガスル（Ga zul）のアナグラムになっています。アナグラムというのは、一つの単語の中の文字の配列順序だけを変えて別の単語を作る一種の言葉遊びで、ヨーロッパでは、このアナグラムがしばしば現われてきます。たとえば、ヴォルテールの本名はフランソワ・マリ・アルエですが、ヴォルテールという筆名は本名のアナグラムになっています。メリメの「ガスル」と「グズラ」も、こうしたアナグラムの例で、ゲーテはこれが言葉遊びだということに気づいたけれども、プーシュキンは気がつかないで、本当にイタリア語の詩集だと信じてしまったということです。

こうした言葉遊びだけでなく、メリメの作品

には、いつでも何らかの「遊び」の精神が見られるようです。たとえば『シャルル九世年代記』は十六世紀の或る回想録の抜萃ということになっていて、作者のメリメは作品から一歩離れたところに位置しています。あの『カルメン』でさえ、ビゼエの歌劇とは大ちがいで、ドン・ホセがカルメンを殺害するというクライマックスのあとで、「ジプシーの起源と言語」に関する学術論文（？）風の記述が長々と続きます（ただし、この「論文」は、専門学者の目から見ると、あまり正確なものとは言えないようです）。このようなメリメの態度に対しては、色々と批評もされておりますが、筆者はやはり、文学活動においても、一歩しりぞいて、文学活動をしている自己自身を冷静に観察するような一種の「ゆとり」と「遊び」の精神をメリメの文学活動の中に見ないわけにはいきません。このような態度も、目まぐるしく変化するフランス政情の中で生粋のバリっ子が生きていく上での一つの態度として理解されなければならないでしょう。

メリメが情熱をもって打ちこんだものは二つあります。つまり、旅行と恋愛です。この二つがメリメの人生に与えた影響は、はかりしれないものがあると言わなければなりません。18-26年、二十三歳のときにはイギリスに行っていますが、このときはドラクロワが同行しています。いったいにメリメは父親が画家であったことでもあり、若い時から画家との交際があり、自分でも画を描いていたようです。また、イギリスの文学者であるハズリットを訪問したのも、この時のことだと思います。しかし、メリメにとってさらに重要な旅行は、1830年のスペイン旅行で、このときに、スペインの貴族テバ伯爵（のちのモンティーホ伯爵）の家に滞在して、当時四歳であった伯爵の次女エウヘニアと知り合いになりました。また、モンティーホ伯爵夫人も、これ以後メリメの良き理解者となります。メリメは幾つかの官職を歴任しますが、1834年、三十一歳のときに「史的建造物監督

官」(Inspecteur des monuments historiques)という職についてからは、職務上からもフランス各地へ旅行し、また、コルシカ島(1839年)やギリシャ(1841年)にも出かけていきます。特にコルシカ旅行は、『コロンバ』(1840年)を執筆するきっかけとなったものとして重要です。

メリメは生涯結婚はしませんでした。恋愛事件はかなり多いようです。もともとハンサムで、都会的で、洗練されていて、愛想のよかったメリメは、上流の婦人たちの間で相当の人気があったと思われます。メリメが話上手であったことは、作品の中からも読みとれますし、また、スタンダールなどに宛てた書簡からも分かります。二十五歳のときに、エミリ・ラコストという人妻と恋愛して、主人と決闘したというあたりに、メリメの一つの顔が現われているのかもしれませんが。1833年の春には、短期間ですが女流作家ジョルジュ・サンドの愛人であったようです。ミュッセの恋人であり、ショパンの愛人でもあったこの男装の女傑(?)が、「ノアンの奥様」として落ちついた生活に入るのはまだ先のことでした。しかし、メリメにとって最も永続した恋愛関係は、1836年に始まり、1854年に決定的な破局を迎えるドレセール夫人との関係でしょう。ドレセール夫人はメリメの文学活動にとっても重要な影響を与えていると言われます。

メリメの文学活動は多彩ですが、その傑作と言われるものは、短篇小说に多いようです。初期の『マテオ・ファルコネ』、『シャルル十一世の幻想』、『タマンゴ』、『トレドの真珠』(いずれも1829年発表)以来、『エトルリアの壺』、『ロンジノの話』、『すごろく将棋の勝負』(いずれも1830年発表)を経て、『イーールのヴィーナス』(1837年)に至る作品群はいずれも短篇です。1840年の『コロンバ』、1845年の『カルメン』にしても、長編とは言えません。短篇小説集『モザイク』(1833年

刊行)はメリメの文学活動の一つの要約と言えます。これらの短篇群のテーマには、ローマン主義の全盛時代の影響もあって、怪奇趣味や原始的な情熱に対する愛好、過去の時代に対する傾斜が見られますが、ただ、そのような題材が、前にも述べた通り、「ゆとり」と「遊び」を伴って、冷静に客観的に見つめられている点で、本来のローマン主義的な傾向からは区別されなければなりません。また、注意すべきことは、以上でメリメの文学活動が尽されているわけではなく、たとえば『ローマ史研究』(1844年刊行)や『ドン・ペドロ一世伝』(1848年刊行)のような歴史、伝記があり、また、プーシュキンやツルゲーネフの作品をフランスに紹介したことも忘れるわけにはいきません。

メリメは兵役に服したことが二度あります。第一回は1830年、七月革命のときで、国民軍の兵士となり、このときはアレクサンドル・デュマ(父)が同僚でした。二回目は1848年、二月革命で、国王ルイ・フィリップが退位したときですが、やはり国民軍の兵士として戦争を体験しています。このあと、フランスはルイ・ナポレオンが大統領となり、さらに、1852年にこのルイがクーデターによって皇帝ナポレオン三世になりました。一方メリメは同じ年に或る事件に連坐して投獄される破目になります。ところが、1853年になると、かつての四歳の少女エウヘニアが今や二十七歳の貴夫人になり、ナポレオン三世と結婚してユージェニー皇后となります。皇后の推薦で、メリメは「空からものが落ちてきて頭に当たったように」突然上院議員に任命され、以後1870年まで皇帝の宮廷に勤務することになりました。フランスが普仏戦争に敗れ、1870年9月23日パリがプロシア軍に包囲されている間に、メリメは南仏のカヌで、皇后の身を案じながらぜんそくのために亡くなりました。パリの陥落とフランスの屈辱を見ずに亡くなったのが、せめてもの幸せであったのかもしれませんが (哲学)

* 本 と 私 *

本 と 私

高 橋 康 子

縁側の陽だまりで、猫が気持よさそうに、寝ています。庭の柿の木には、熟した実がいくつか残って、弱い陽ざしの中で赤く色染め秋の風情をいっそうもりたてています。

そんな静かな日の午後、学校から帰るとすぐに、ランドセルをほうりだし、最後まで陽のこの縁側にはらばいになり、友達から借りてきた童話の本を読むのが何よりのたのしみでした。もちろん、顔は陽かげに、足だけ陽だまりに出し、まんまるい飴玉を口の中できがしながら——そのぬくもりと、甘さが、今でもなつかしく、秋日和には、何もかもほうり出して、そんな静かなひとときを持ちたいと、つくづく思います。

推薦した図書は、冬でも暖かい国を求めて、南の島の木陰で読んだ本の一部です。

いささか暑くて、秋の陽だまりとはいきませんでしたが、それでもゆっくりと、夢をひろげ

ることができました。

幼ない頃の自然の中での本との出逢い。驚きと喜びは、今なお生きつづけています。

人は何によって感動し、物事を認識するのでしょうか。ちょっとした人の行動、自然の動き——しかし、よく見えていて、慣れすぎてしまった今日、脈々とした、自然の生きざまと姿をみることで本に出逢うことがあります。表現される一つ一つの事柄は、両眼と、足をつかい行動するそのことと同等の迫力で私に迫ってきます。

秋の日に出逢った童話、今日出逢った本、私自身の本に対する認識に変化があったかもしれませんが、今なお心の中に生きのこる、どうすることもできない衝動……

私にとって、いい本に出逢うということは、ひょっとして、こういうことなのかもしれません。
(体 育)

僕 の 読 書

大 橋 常 道

僕は読書の下手な人間である。というのは面白い本は読み始めると、食事も、寝ることも忘れて全部読んでしまう迄、安心できないのである。毎日少しづつ一週間で読み上げようなどという事は決してできない。何故ならば、3日目位には、第1日目に読んだ部分の印象が薄くなってしまい、その作品のもっている世界の中に浸りきるためにはもう一度最初から読まなければならないのである。従って大作と呼ばれている小説等は、夏休みあるいは冬休みにしか読めなかった。また学生時代に諸先生方の推薦する、いわゆる文学作品という類いのものは、読むことは読んだけど（「見ることは見たけれども」の方が正しいかもしれない）、深く印象に残っているものは僅かしかない。しかし僕

にとっての読書というものは、この様なものだから仕方がない。この傾向は、教壇に立つ立場になった現在でも変りがない。よって休みが学生の頃より忙がしい今日では、本を読むことが少なくなってしまった。以上の理由で、私の推薦した図書は、比較的最近のもので肩が凝らずに読めるものばかりであり、大作と呼ばれている長編小説は含まれていない。推薦の理由は、①不覚にも涙がこぼれてしまったから（走馬燈、オットー・ハーン自伝）、②SF小説の中では、比較的矛盾が少ないから（星を継ぐもの）、③数学をやる者として、自然科学と人間の未来に興味があるから（生物はなぜ進化したか、人間の終焉、反科学論）である。

(数 学)

推薦図書について

下記の図書は、教養部の先生方から推薦していただいたものです。これは、教養部の先生がたが専門の分野をこえ、人生の指針となる本、青春時代の栄養となる本を、ひろい立場から5冊程度えらんで下さったものです。これらの図書は教養図書館の一隅「推薦図書コーナー」に別置されていますので、どうぞご利用下さい。

また、これからしばらくこの「閲覧ニュース」で先生がたに御登場ねがい、「本と私」というシリーズを続けていく予定です。

- ・ 排列は推薦者は、アルファベット順です。(敬称略)
- ・ 卒印は、只今整理中の図書です。
- ・ 図書は推薦者の推薦順位に従っています。
- ・ 閲覧、貸出は一般図書と同様です。

推薦図書リスト

天野卓治〔物理学〕

広島の記録 1,2,資料編

916/C62,C62h,C62s

中国新聞社編

1966 未来社

黒い雨

913.6/I12

井伏鱒二著

1968 新潮社

わが解体

914.6/Ta33w

高橋和己著

1971 河出書房新社

愛と認識との出発

⑤914.6/Ku56a

倉田百三著

1968 角川書店

叛逆のバリケード

377.96/N71

1969 三一書房

青野桂子〔物理学〕

山椒魚

⑤913.6/I12

井伏鱒二著

1975 新潮社

モラトリアム人間の時代

361.6/O53

小此木啓吾著

1980 中央公論社

知と愛

⑤943/H53c

ヘッセ著(高橋健二訳) 1961 新潮社

沈黙

913.6/E59

遠藤周作著

1966 新潮社

忘れられた日本人(宮本常一著作集第10巻)

380.8/Mi77/10

宮本常一著

1975 未来社

入手高桑雄〔数学〕

戦争と平和

⑤983/To47h/V.1~V.8

トルストイ著(米川正夫訳)

1967 岩波書店

罪と罰

⑤983/D88t/V.1~V.8

ドストエフスキー著(中村白葉訳)

1970 岩波書店

ニュルンベルク裁判

マーザー著(西義之訳) TBSブリタニカ

権力とたたかう良心(ツヴァイク全集17)

948/Z9/17

ツヴァイク著(高杉一郎訳)

1974 みすず書房

石川俊明〔物理学〕

新電磁気学 上・下巻

飯田修一著

丸善

伊藤彰夫〔体育〕

衝突する宇宙

445/V56

ヴェリコフスキー著(鈴木敬信訳)

1974 法政大学出版局

伊藤幸子〔英語〕

カラマーゾフの兄弟 ⑤983/D88/V.1~V.4

ドフトエフスキー著(米川正夫訳)

1967 岩波書店

饗宴

⑤131.3/P71

プラトン著(久保勉訳)

1967 岩波書店

異邦人(カミュ全集2)

958/C14/2

カミュ著(中村光夫訳)

新潮社

芭蕉七部集

⑤911.32/Ma85

中村俊定校注

1966 岩波書店

雨月物語

⑤913.56/U32u

上田秋成著

1953 岩波書店

神達章子〔数学〕

夜と霧

946/F44/C.2

フランクル著(霜山徳爾訳)

1974 みすず書房

猫と鼠

943/G77

グラス著(高木研一訳)

1972 集英社

後世への最大遺物

190.4/U19

内村鑑三著

1969 岩波書店

積みすぎた箱舟 480.4/D88a

ダレル著(浦松佐美太郎訳)

1977 暮しの手帖社

大橋常道〔数学〕

星を継ぐもの ㊦933/H81

ホーガン著(池央耿訳)

1980 創元社

走馬燈ーその人たちの人生ー 198.221/E59

遠藤周作著 1977 毎日新聞社

生物はなぜ進化したか 467.5/A86

浅門一男著 1979 講談社

人間の終焉 404.9/W46

渡辺格著 1976 朝日出版社

反科学論 404/Sh18

柴谷篤弘著 1973 みすず書房

オットー・ハーン自伝

山崎和夫訳 1977 みすず書房

岡野安洋〔独語〕

中原中也全集(全5巻・別巻)

中原中也著 角川書店

石原吉郎全集(全3巻)

石原吉郎著 花神社

詩への架橋 岩波新書12

大岡信著 1977 岩波書店

小野健一〔物理学〕

解析概論 413/Ta29

高木貞治著 1938 岩波書店

類人猿の知恵試験 481.78/Ko22

ケーラー著 1962 岩波書店

風車小屋だより ㊦953/D45f

ドーデー著(桜田佐訳)

1932 岩波書店

坂入 清〔独語〕

学生に与う ㊦159.7/Ka93g/V.1

河合栄治郎著 1975 社会思想社

論語 ㊦123.83/Ko84

貝塚茂樹訳注 1979 中央公論社

ファウスト ㊦942/G56

ゲーテ著(手塚富雄訳)

1974 中央公論社

椿の海の記

石牟礼道子著 1976 朝日新聞社

独学のすすめ 370.4/Ka86

加藤秀俊著 1975 文芸春秋社

瀬谷幸男〔英語〕

四つの愛 934/L59

ルイス著 1970 新教出版

オシアン(ケルト民族の古歌) ☆

中村徳三郎訳 岩波書店

紀行と随想 304/H88

堀米庸三著 1976 近藤出版

デカメロン物語

野上素一訳

ギリシャ抒情詩選 ㊦991/G47

呉茂一訳 1959 岩波書店

正田庄次郎〔経済学〕

生活の貧しさと心の貧しさ 304/O88

大塚久雄著 1979 みすず書房

折々のうた 岩波新書113

大岡信著 1980 岩波書店

女性の権利の擁護(上)・(下)

ウールストンクラフト著 清水書院

物理学とは何だろうか(上)・(下) 岩波新書85,86

朝永振一郎著 1979 岩波書店

生きがいについて 159/Ka39

神谷美恵子著 1966 みすず書房

高橋康子〔体育〕

未来行き列車に乗って ☆

真鍋博著 文化出版局

歴史は生きている

村上元三著 ゆまにて出版

墨いろ 728.04/Sh66

篠田桃紅著 1979 P.H.P.研究所

食 味

辻嘉一著 P.H.P.研究所

歴史・遠いあし音

尾崎秀樹著 ゆまにて出版

立川昭二〔歴史学〕

ガン病棟(上)・(下) 983/So35/V.1~V.2/C.2

ソルジェニーツィン著(小笠原豊樹訳)

1969 新潮社

方丈記私記 9146/H96h/C.2

堀田善衛著 1971 筑摩書房

医学の哲学 490.11/O63

澤瀉久敬著 1971 誠信書房

自註鹿鳴集

会津八一著

中央公論美術出版

慰めの音楽

760.4/D84

デュアメル著(尾崎喜八訳)

1974 白水社

山根和平〔哲学〕

最後の診断

㊦933/H15

ヘイリー著(永井淳訳)

1979 新潮社

裸のサル

481.7/Mo78

モリス著(日高敏隆訳)

1977 角川書店

ヒトと動物

481.78/H77

ローレンツ他著(奥井一満訳)

1975 思索社

ライフサイエンスの哲学

㊦461/Sa93

沢田允茂著

1969 講談社

資料紹介

新聞

当館では、下記の新聞を定期受入しています。

朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、日本経済新聞、神奈川新聞、北海道新聞、河北新報、信濃毎日新聞、中国新聞、西日本新聞、沖縄タイムス、図書新聞、日本読書新聞、週刊読書人、医海時報、The Japan times、Asahi Evening News、その他、神奈川県のとより、さがみはら、出版ダイジェストなど、詳しくは受付にておたずね下さい。なお、新聞は2ヶ月間保存、縮刷版を受入れた段階で廃棄します。

年鑑

世界年鑑	1964 -
朝日年鑑	1925 -
時事年鑑	1965 , 1970 -
毎日年鑑	1964
神奈川年鑑	1968 -
沖縄年鑑	1968 -
日本新聞年鑑	1964 , 1971 , 1975
日本文献年鑑	1975 , 1976 , 1977
国際連盟統計年鑑	1926 - 1940
世界統計年鑑	1963 - 1977
日本統計年鑑	1964 , 1969 , 1970
社会保障年鑑	1961 - 1974
国際労働統計年鑑	1963 - 1968
日本労働年鑑	1949 - 1973
日本社会事業年鑑	1920 - 1943
日本教育年鑑	1970 , 1971
防衛年鑑	1966 - 1972
国民医療年鑑	1964 -
薬業経済年鑑	1968 , 1971
日本農業年鑑	1967 , 1969 , 1970 -
水産年鑑	1970 -
交通年鑑	1969 -
英語年鑑	1967 - 1968
出版年鑑	1955, 1958, 1959, 1961 - (昭和5~23年復刻版有)

白書

当館には以下の白書があります。

防衛白書、防災白書、地方財政白書、中小企業白書、英文科学技術白書、英文環境白書、原子力白書、犯罪白書、科学技術白書、海上保安白書、環境白書、警察白書、経済白書、建設白書、国民生活白書、厚生白書、独占白書(公正取引委員会年次報告)、交通安全白書、労働白書、青少年白書、世界経済白書、消防白書、通信白書、通商白書、運輸白書、教育白書、図説漁業白書、図説厚生白書、図説農業白書、図でみる中小企業白書。

その他にも、いくつかの白書があります。詳しくは、雑誌目録でお調べ下さい。

新入生の皆様へ

ご入学おめでとうございます。この冬は、例年にない寒さでしたが、春の訪れとともに皆様をお迎えすることが出来、館員一同うれしく思います。この『閲覧ニュース』が皆様と教養図書館のコミュニケーションに役立つことを願います。年3~4回の不定期刊行ですが、何卒ご愛読下さるよう館員一同切望しております。

閲覧ニュース30号

1981. 4. 発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

発行責任者 小野健一